

あとがき

企画・編集委員 石井 研 士

本紀要号は「日本人の靈魂観と慰霊」を特集した。内容の充実ぶりは、まずもつてその厚さから推察いただけるものと思う。巻頭言から始まり、学界・論壇の第一線で活躍する二名の研究者による論文は、一冊の著作にも引けを取らないだろう。ひいき目に見ても、これだけの執筆者による紀要号はかなりのものである。多士済々が論ずる「日本人の靈魂観と慰霊」は、多様な視点から立体的に問題の所在を浮かび上がらせている。しかし中心テーマからはぶれていない。興味深い一冊になったと思う。

目次をご覧いただければわかるように、二一本の論文は、読みやすさを考慮して、四つのグループに分けてある。ⅠからⅢのグループまでは、古代から現代まではほぼ時間軸に沿って分け、Ⅳのグループは比較を念頭に置いて配置した。個々の研究者の問題関心は、必ずしも特定の領域に限定されるものではない。あくまで便宜的なものであることをお断りしておきたい。

特集号のテーマに関しては、その他にも平成一八年一〇月に開催されたシンポジウム「日本人の靈魂観と慰霊」を収録した。本号の特集テーマは、継続して考察されてきたものの成果である。研究ノート、随想、書評の中にも関係したものが含ま

れている。あわせてご覧いただきたい。

フランスの歴史学者・フィリップ・アリエスの『死と歴史』が刊行されてから三〇年が経過した。アリエスはこの本で、現代における「死」は、人類が始まって以来きわめて特異なものであると指摘している。人間は死を避けることができないと承知しながらこれを見ないようにするという風潮が生れたという。アリエスはこれを「隠された死」と呼んでいる。ところがどうだろう。死の問題は再び我々の日常に戻ってきたように思われる。そもそも死は、いったい誰にとつての死なのだろうか。個人なのか、家族なのか、地域社会なのか、国家なのか。死は複雑な意味世界の中で問われている。

本号には、特集に関係する論文、研究ノート、シンポジウム以外にも、興味深い内容を収録することができた。本会は、本年七月にシンポジウム「陰陽道と神道 歴史的視点から見た」を開催した。シンポジウムは大盛況のうちに行われ、岡田莊司國學院大學教授の司会により、林淳愛知学院大學教授の明確な論考と軽妙な講演、そしてその後の討論は、多くの聴衆を魅了した。当日の熱気と楽しさが伝われば幸いである。

冒頭で本号の「厚さ」に言及したが、現在企画中の次号も、さらに厚さを増す勢いである。「厚さ」は大勢の方々によって本会が支えられていることの証しである。

(國學院大學教授)